

能代北高跡地のワークショップニューズレター

## これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School  
and the future of Noshiro City

Vol.5

Newsletter

「実証実験プロジェクト、第2弾！」  
北高跡地で展望してみる#北高跡地活用  
アーカイブはこちら  
NPO法人アーツセンターあきた

## 能代北高跡地活用の可能性を探る実証実験プロジェクト

2014年3月に秋田県から能代市に譲与された能代北高跡地。更地となって8年、これまで複数の提案や意見があり、周辺の商店街を含めたつながりを考慮した検討が必要とされてきました。2020年度に秋田公立美術大学が実施した基礎調査では、実験的な取り組みを続けて中心市街地活性化に向けた機運を醸成する思考継続型プロジェクトを提案。2021年度は北高跡地活用の可能性を検討するためのワークショップを行い、2022年度は実証実験プロジェクトへと移行しました。ニューズレターVol.5では、2022年11月に実施した第2回実証実験プロジェクト「北高跡地で展望してみる」を報告します。(企画・運営：秋田公立美術大学)



北高跡地活用に関する能代市のウェブサイトはこちら

## ワークショップ&amp;実証実験スケジュール

2022年度は前年度を振り返るワークショップに加え、実証実験プロジェクトを2回行いました。プロジェクトの内容はニューズレターやNPO法人アーツセンターあきたのウェブサイト、能代市役所のウェブサイトからご覧いただけます。

## 第3回 ワークショップ:

日時 | 2022年8月27日(土)13:00 ~ 16:00

場所 | 能代市役所

## 第1回 実証実験プロジェクト:

日時 | 2022年9月24日(土)14:00 ~ 25日(日)11:00

場所 | 能代北高跡地

## 第2回 実証実験プロジェクト:

日時 | 2022年11月20日(日)11:00 ~ 15:00

場所 | 能代北高跡地

## 第2回 実証実験プロジェクト

## 「北高跡地で展望してみる」

日時 | 2022年11月20日(日)11:00 ~ 15:00

場所 | 能代北高跡地(能代市追分町1-36)

## プログラム

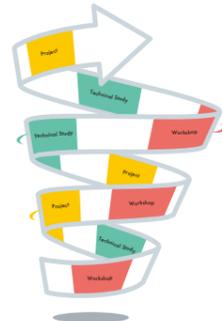
11:00 スタート  
11:00 1回目～  
12:00 休憩  
12:45 5回目～  
17:00 終了

※1回の所要時間は約45分  
受付後ハーネスを装着して展望(約15分)、その後アンケートに記入していただきます。

- プロジェクト  
Project
- 技術的検討  
Technical Study
- ワークショップ  
Workshop

創造的な意見交換を行う「ワークショップ」と、ワークショップで出たアイデアを専門的な視点から検証する「技術的検討」を繰り返し、実施可能な「プロジェクト」を考えていきます。

2021年度以降の検討イメージ▶



## 実証実験プロジェクト、第2弾！

2021年度のワークショップで提案されたアイデアを整理し、全てを網羅する企画となるようにまとめたのがく宿泊する>>スタートアップ>>展示する>>つくる>>展望する>の5つのプロジェクトでした。第1弾の「北高跡地で宿泊してみる」(ニューズレターVol.4で報告)では、北高跡地に宿泊するという、これまでにない街の過ごし方を試みました。街なかの小高い場所で見上げる空の広さや歩いて知った土地の起伏など能代ならではの姿が見えた体験もありました。一方、長時間滞在するプロジェクトの実施には、雨風を凌げる場所や水場の必要性も実感しました。そして、第2弾は「北高跡地で展望してみる」。事前に募集した参加者に当日参加の方々も加え、およそ15メートルの高さから能代の街を展望します。



## 【実証実験プロジェクト2】

標高約18mの北高跡地で  
約15mの高さから、能代の街は  
どのように見えるのだろう

能代北高跡地の活用可能性を探るため2022年度に行なった第3回ワークショップでは、「能代北高跡地に能代のランドマークはつくれないだろうか?」「高い建物があれば、秋田県内で一番長い米代川の流れや河口の様子を見たり、世界遺産の白神山地の山並みが一望できる」「冬に来る渡り鳥を眺める場所としてもいい」などのアイデアが出ました。

一方、建物ではなくイベントとして、気球やドローン、星空観察をする場所としてのアイデアも出ていました。「気球を上げて、北高跡地から能代を眺めてみたい」「ここからドローンを飛ばしたい」「空気が澄んでいて、周囲は暗いので星空がきれいに見える。星のお姉さんと呼ぶなどして鑑賞したい」など、北高跡地の広さと高さを活かした案です。プロジェクションマッピングで花火を鑑賞する案や、能代七夕の天空の不夜城をここでという案もありました。

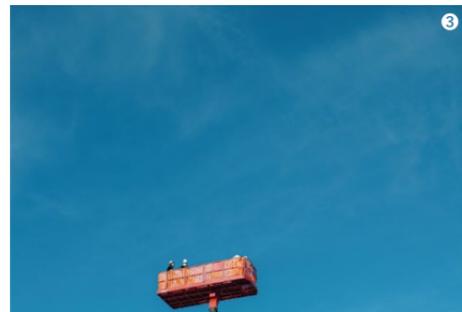


「北高跡地で展望してみる」募集チラシ

## &lt;展望する&gt;

- ・米代川、小友沼などを一望する建物。
- ・展望する建物には木都ならではの木のイスを置きたい。
- ・世界遺産の白神山地を望むことができる場所にしたい。
- ・お花畑を子どもたちとつুক্তって、高いところから見晴らす。
- ・土地の広さを活かして気球を上げるイベントを開催。能代の街を見下ろす。
- ・ドローンの発着場所に。
- ・能代港に来る船よりも高い場所から能代を一望できることをPRしたい。
- ・プロジェクションマッピングで花火を鑑賞。
- ・星のお姉さんと呼んで星空鑑賞会をしたい。

こういったアイデアをもとに、能代の街を一望するような高さを体験するために計画したのが、今回の実証実験プロジェクト第2弾「北高跡地で展望してみる」です。用意したのは、トラック式の高所作業車。標高約18mの北高跡地で高所作業車に乗り、およそ15mの高さから能代の街を眺めてみるプロジェクトです。北高跡地からどのような展望ができるのか、いつもの街をいつもと違う高さ、違う視点から見えます。

白神山地の山並みや日本海を  
高台から眺める

11月20日(日)10:00、スタッフが到着する頃には高所作業車はすでにスタンバイしていました。焚き火を起こして暖をとって、ハーネスやヘルメットの準備をして参加者を待ちます。11:00から15:00まで、途中休憩をはさみながら高所作業車を何度も上下させる計画です。今回、受付にはアンケート台を設置しました。北高跡地のこと、実証実験プロジェクトのことなども参加者から聞き取っていきます。

1. 搭乗するグループごとにハーネスとヘルメットを装着してバケットに乗ります。
2. 高所作業車のバケットにはオペレーターを含めて8人が搭乗可能。最大地上高は14.8m。
3. 秋空にオレンジ色のバケットが高々と上がっていきます。高所作業車に乗って上から展望する人にとっても、下から見上げる人にとっても、気持ちいい眺めとなりました。
4. 能代の木材産業や舟運を支えた米代川に沿うように、東西方向に形成された能代の街を見渡します。

高所作業車のバケットに乗り込み、グラウンドから少しずつ上がっていくと徐々に能代の街並みが見えてきます。白神山地の山並みは淡く空の色と溶け込み、日本海は穏やかに横たわって見えます。北高跡地に残る松の濃い緑色と遠くの淡い景色、そして能代の街の建物と自然と景色を360度見渡しました。見下ろせば、こちらを見上げるスタッフや搭乗を待つ参加者の姿が小さく見えます。北高跡地のグラウンドの土の上に、空中にいる自分たちの影が映し出されていることに、どこか不思議な感覚をおぼえました。



## いつも見ている景色とは違う景色。 能代には、何があるのか 私たちは何に囲まれて暮らしているのか

「北高跡地で展望してみる」の参加者は、事前申し込みと当日参加を合わせて23人。10代から90代までの幅広い年齢層の参加者が高所作業車に乗り、高さ約15mというおよそ5階建てのビルの高さに相当する場所から能代の街を展望しました。「能代に住んでいる人はここがどういふ街なのか分かってはいるはずだけれど、いつも見ている景色と、高いところから見る景色とではまるで違う。高いところから展望することで、この街には何があるのか、私たちは何に囲まれて暮らしているのかが実感できた」と参加者。高い場所から見渡す能代の街の姿に、いつもとは違う印象を抱いた人が多かったようです。実際に長くこの街に住んでいる人や子どもたちから、体験後にいろいろな感想をいただきました。



### <展望してみた感想>

- ・海がとてもよく見えて、ここは高いところなんだと思った。
- ・能代はあまり高いビルがなく、視界を遮るものがないから見渡すと気持ちがいい。
- ・眺めて感じたのは、一言でいえばセピア色。すこし寂しい街だなと思った。街なかに何か心が輝くような場所があったらいい。
- ・山のほう、白神山地はやはりきれいだと思った。
- ・街に何があるのかが分かる場所だと思った。
- ・能代の風車、火力発電所。遠くに男鹿半島や白神山地が見えて地形を実感できたし、どこに何があるのか、どこがどうなっているのか地形を知るの大事だと思った。
- ・空が近く、地球を感じる。
- ・イオンの屋上と同じぐらいの目線にいるのがよかった。
- ・高所作業車で高いところへ上がるのは、アトラクションのように楽しめた。高いところにあるこの土地はいいなと思った。

## 新しい公民館的な場所として、 避難場所や、交流の場所として

実証実験第2弾の参加者にご協力いただいたアンケートでは、これまでのワークショップと同様、北高跡地の利活用についてご意見やアイデアをさらにいただきました。

### <北高跡地の利活用やイベントについて>

- ・公園にしたい。
- ・ピクニックができるガーデンや公園。
- ・オートキャンプ場（フリースペース）にしたい。
- ・木都能代を代表する秋田杉の建物があるといい。
- ・この実証実験のようなイベントをもっとPRして開催すればいい。ファミリーが楽しめる企画との抱き合わせを期待。
- ・避難所として、イベントスペースとして、普段から親しみを持てる場所になればいい。例えば避難訓練でのキャンプ（ソーラーパネルを使用、非常食を期限内に食べる体験）、キッチンカーが集まり、機能性の高い公園など。
- ・新しい公民館的な場所として、避難場所であり、子どもから年配者まで誰もが訪れることのできる交流の場に。キャンプサイトや宿泊施設もあったらいい。
- ・バスケットボールのハーフコートやテニスコートなどの運動施設がほしい。
- ・展望台ならもっと高くしてほしい。
- ・「ふるさと泊」のように能代に実家がなくなった人のための簡易宿泊所にするのはどうか。



イオンから眺める北高跡地は、街並みのなかにぽっかりと空いたような空き地。オレンジ色の高所作業車のバケットがぐんぐん上がっていくのが見えました。



## コロナ禍を経て、能代北高跡地と 中心市街地の未来をこれから

秋田公立美術大学の景観デザイン専攻では、2020年度に能代北高跡地利活用基礎調査、2021年度には利活用を探るためのワークショップを行い、2022年度は短期的プロジェクトを行って検証する実証実験の段階へと移行しました。「北高跡地に宿泊してみる」「北高跡地で展望してみる」を終えてプロジェクトメンバーが集まり、2022年度の振り返りと今後について話し合いました。

実証実験プロジェクトには関心を寄せている方々の参加はあったものの、もっと多くの市民にご参加いただくために広報の充実を図りたいこと、実施日を早めに決めた上で準備に時間をかけたいことなどを確認しました。<宿泊>は参加者も事前準備が必要でしたが、準備のいらない<展望>では噂を聞きつけて当日急ぎ参加された方も多く、より広く知っていただくことが大切であることを実感しました。

今後予定しているのは、<北高跡地で展示する><北高跡



地でスタートアップ>>北高跡地で作る>>の3つです。2022年度に行った<宿泊>では能代の歴史を知るまちあるきや木工体験、火起こし体験を組み入れたように、今後の実証実験プロジェクトにおいても単体ではなくさまざまな体験を組み込んでいけたらと考えています。

<北高跡地で展示する>に関しては、この場所を起点としながら、今あるいろいろな資料を見に行くツアーのほか、デジタル展示の検討についても考えています。ツアーでは、能代の文化財を見に行くだけでなく、専門家を呼び、アーカイブについて知識を深めることも必要です。ツアーに加えて、木工などのワークショップや宿泊を組み込んでいってもいいかもしれません。また、<展望>の参加者からはピクニックができたりキッチンカーが集まってくるような公園など自由度を高くして使いたいという意見が多かったことから、それも念頭に置きながら進めていきたいと考えています。

基礎調査とワークショップ、実証実験プロジェクトを進めたこの3年はコロナ禍でした。ワークショップが中止になったり、なかなかうまく進行できなかったこともありましたが、引き続き実証実験プロジェクトを通じて、北高跡地と中心市街地の未来を一緒に描いていきたいと考えています。



## 実証実験プロジェクトは 2023年度も続きます！

北高跡地における利活用の可能性を探るプロジェクトは2023年度も続きます。ワークショップのこと、実証実験プロジェクトのこと、このニューズレターのことなどはNPO法人アーツセンターあきたまでお問い合わせください。

お問い合わせ先：  
NPO法人アーツセンターあきた ☎ 018-888-8137

### プロジェクトメンバー

小杉栄次郎（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）  
井上宗則（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）  
船山哲郎（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）  
田村剛（NPO法人アーツセンターあきた）  
徳川美穂（NPO法人アーツセンターあきた）

### 能代北高跡地のワークショップ

ニューズレター「これから、ここから。」 Vol.5

2023年3月発行

発行 公立大学法人 秋田公立美術大学  
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3  
TEL.018-888-8100

※能代北高跡地利活用可能性検討業務の一部として作成しています。  
デザイン：越後谷洋徳 写真：伊藤靖史  
編集：高橋ともみ 制作：NPO法人アーツセンターあきた